

「ふるさと」意識に関する調査

吉 田 恭 爾 *

上 笹 恒 **

横 山 十四男 ***

1. はじめに

「ふるさと」は、古今、洋の東西をとわず人々の心の中にあつて、人々の準拠できる碇泊点となっていることは、われわれの生活実感でもあり、また、昔から数々の文学的名作などにおいてもその心情が巧みに表現されているとおりである。

しかし、今日のように交通機関とコミュニケーション・メディアの著しい発展を背景とした社会的可動性、流動性の増大や生活領域のあらゆる側面での社会的変化の加速化された状況に到つては、人々はかつてのような意味での「ふるさと」が持ちにくい事態が出現して来ている。そこで、人間の持つ環境への適応能力や心理的な多様な問題についても、このような時代的狀況と合わせた分析がなされている。かつて、ロジャースらによって用いられ、農村社会学のさまざまな領域に於けるコミュニケーション行動の現象を、うまく説明していたローカリティとコスモポリタンといった2つの類型化は、もはや時代に即応しなくなっているといえよう。

今回、われわれのグループは、このような時代にあつて、日本人がどのような「ふるさと意識」をもっているのかを、ごく大まかな傾向として把握するために、全国に散らばる社会科教育コース卒業生諸君の協力を得て、簡単な質問紙調査を実施した。

しかし、これはあくまでも試験的な調査であつて、当初から十分枠組みを検討し、日本人の「ふるさと意識」の全体的構造を正確にとらえることを試みたものではない。とりあえず、これから紹介していく質問にみられるような内容の事実をまず、おさえておきたいとの目的で実施されたものである。

調査は、東京都、神奈川県、埼玉県、栃木県、茨城県、千葉県、宮城県、山形県、静岡県、岡山県、広島県の11都県にわたる17の中・高校の協力によって行われた。

それらの学校の生徒に調査票を配布し、家庭に持ち帰って親に記入を依頼する自記式調査であ

* 前筑波大学社会科学系

** 筑波大学哲学・思想学系

*** 筑波大学教育学系

る。実施期間は昭和59年6月末～7月初であった。

調査対象者全体（N = 827）の年齢、性別構成を示すと次の表1、表2の通りである。

表1. 年 齢 構 成

	年齢	頻度	比率
1	20～29	23	2.8%
2	30～39	122	14.8
3	40～44	341	41.2
4	45～49	239	28.9
5	50～54	69	8.3
6	55～59	14	1.7
7	60～64	8	1.0
8	65～69	4	0.5
9	70～	7	0.8
合 計		827	100.0

表2. 年 代 と 性 別

	20代	30代	40代	50代	60代～	合 計
男 性	17 5.2%	25 7.6	216 65.5	59 17.9	13 3.9	330 100.0
女 性	6 1.2%	97 19.5	364 73.2	24 4.8	6 1.2	497 100.0
合 計	23	122	580	83	19	827

また、今回の対象者の現住所の特徴は次の表3のようである（質問1による）。

表3. 現住所の特徴

	場 所 的 特 徴	頻 度	比 率
1.	<input type="checkbox"/> 市街地で商店や工場の多い所	122	14.8%
2.	<input type="checkbox"/> 市街地の住宅地	296	35.8
3.	<input type="checkbox"/> 都市郊外で付近にまだ畑が残っている所	223	27.0
4.	<input type="checkbox"/> かなり広い平地のある農村	69	8.3
5.	<input type="checkbox"/> 山に囲まれている山村	71	8.6
6.	<input type="checkbox"/> 海に面している漁（農）村	20	2.4
7.	<input type="checkbox"/> 海に面している市街地	7	0.8
8.	<input type="checkbox"/> その他	17	2.1
9.	<input type="checkbox"/> NA（無回答）	2	0.2
合 計		827	100.0

2. 「ふるさと」の認識

2.1 「ふるさと」があるか

はじめに、質問2の回答にしたがって、今回の対象者がどの程度「ふるさと」を意識しているのか、その「ふるさと意識」を見てみよう。次の表4はあなたには、はっきり故郷と言えるところがあると思いますか。”という質問2の回答選択肢の周辺分布を示したものである。

表4. 「ふるさと意識」の有無

Q 2		頻 度	比 率
1.	<input type="checkbox"/> あると思う	554	67.0%
2.	<input type="checkbox"/> あまりはっきりはしないが、あると言える	106	12.8
3.	<input type="checkbox"/> 故郷と言えるところがない	155	18.7
4.	<input type="checkbox"/> NA	12	1.4
合 計		827	100.0

これによれば、2/3の対象者は「あると思う」と回答し、漠然としてでもあると思う人を加えると80%近くなる。これには性差が僅かではあるが存在し、男性の方が強いようである(表5)。

表5. 「ふるさと意識」の性差

Q2	1. あると思う	2. はっきりしないがある	3. な い	全 体
男 性	232 71.4%	38 11.7	55 16.9	325 100.0
女 性	322 65.7%	68 13.9	100 20.4	490 100.0

また、年齢と「ふるさと意識」の間には殆ど関連はみられなかった。

ただし、府県別にまとめてみると表6のように「あると思う」と回答している率が平均的なレベルよりかなり高くなっているところもある。サンプル・サイズにもより断定的にはいえないが、今回のサンプルでは表のように岡山県、広島県、宮城県、山形県、栃木県などが

70%以上の率を示して高く、相対的に首都圏がひくい。

表6. 県別にみた「ふるさと意識」

Q2	東京	神奈川	埼玉	栃木	茨城	千葉	岡山	山形	静岡	広島	宮城	全体
1. あると思う	100 59.5%	19 50.0	114 68.6	129 70.5	4 57.1	9 64.3	48 82.7	22 73.3	36 61.0	50 80.6	23 76.7	554
2. はっきりしないがある	21 12.5	7 18.4	21 12.7	26 14.2	2 28.6	3 21.4	2 3.5	3 10.0	10 16.9	8 12.9	3 10.0	106
3. な い	47 28.0	12 31.6	31 18.7	28 15.3	1 14.3	2 14.3	8 13.8	5 16.7	13 22.0	4 6.5	4 13.3	155
全体	168 100.0	38 100.0	166 100.0	183 100.0	7 100.0	14 100.0	58 100.0	30 100.0	59 100.0	62 100.0	30 100.0	815

NHK放送世論調査所の「全国県民意識調査」（1979年）による“あなたは〇〇県人だという気持ちをお持ちですか”（〇〇は居住する都道府県名）という質問にたいする“はい”の反応率と比較すると、今回の調査では岡山、広島が高すぎ、茨城がひくすぎるが、だいたいの傾向はよく一致している。質問のステートメントは異なるが内容的には同じようなことを訊ねているので当然であるが、首都圏を構成する各県や、大阪や名古屋を含む県のように大都市をもつところでは県民意識がひくく、東北、北海道、九州、四国、山陰などの地方で特に高い。このような全体的傾向がよくあっているように思われる。

はっきりした「ふるさと意識」の有無をクロス集計のデータからみると、生まれたところに現在住んでおらず他府県に住んでいる人たちのグループに於いてやゝ強い。現在生まれたところに住んでいるグループの63.9%がはっきりしたふるさと意識をもっているのにたいして、他府県に住んでいるグループではそれが74.6%であった。

2.2 「ふるさと」の範囲、領域の認知

質問5では“あなたは故郷というところの範囲の広がりを考えますか”と「ふるさと」というところの範囲の広がりを考えるかを質問しているが、その回答の周辺分布は次の表7.のようになった。

表7. 「ふるさと」の範囲

Q 5	頻 度	比 率
1. □ 都道府県内	132	16.3%
2. □ 市, 郡, 区内	172	21.3
3. □ 町, 村内	322	39.9
4. □ 出身中学校の校区内	46	5.7
5. □ 出身小学校の校区内	72	8.9
6. □ 大字, 集落内	64	7.9
合 計	808	100.0

(NA=19)

このように、「町, 村内」が最も多く「市, 郡, 区内」, 「都道府県内」がそれに続きドミナントである。

次に, 質問4で自由回答法により対象者が「ふるさと」だと思っているところはどのようなところかを記述してもらっているので, その結果をアフター・コーディングして分布をとってみたのが表8である。

表8. 「ふるさと」の領域

Q 4. あなたにとっての「ふるさと」は	頻 度	比 率
1. 生まれてから12才(小学校卒業)まで住んでいた所	24	3.7%
2. " 15才(中学校卒業) "	113	17.6
3. " 18才(高校卒業) "	72	11.1
4. " 18才以上まで "	55	8.5
5. " 結婚まで	101	15.6
6. " ずっと現在まで住んでいる所	85	13.2
7. 生まれてはいないが過去に住んでいた(現在も住んでいる所)	63	9.8
8. 親の実家があって時々ゆくところ	70	10.8
9. 親兄弟の住んでいる所	48	7.4
10. そ の 他	15	2.3
合 計	646	100.0

(NA=181)

これからわかるように「生まれてからずっと住んでいる所」をのぞくと、「中学校、高校まで住んでいた所」、「結婚するまで住んでいた所」、「親の実家がある所」などで「ふるさと」の主な範囲が示されている。「結婚まで住んでいた所」というのは、特に、女性の場合に明確で、この選択肢を選んだ101名中92.1%が女性で男性は7.9%であった。

2.3 「ふるさと」への懐しさ

質問8では、「ふるさと」が懐しいと思うかどうかを訊ねているが、その全体分布は次の表9のようになって、80%以上の人々が懐しさを表明している。

表9. 「ふるさと」への懐しさ

(8) あなたは故郷が懐しいと思いますか		頻度	比率
1.	<input type="checkbox"/> 大へん懐しいと思う	345	42.8%
2.	<input type="checkbox"/> まあまあ懐しいと思う	338	41.9
3.	<input type="checkbox"/> あまり懐しいとは思わない	99	12.3
4.	<input type="checkbox"/> 全く懐しい気持はない	24	3.0
		806	100.0

(NA = 21)

これを性別でブレイクダウンしてみても性差は見出せないが、年代による差がかなり明瞭である。図1はこの様子を示したものである。

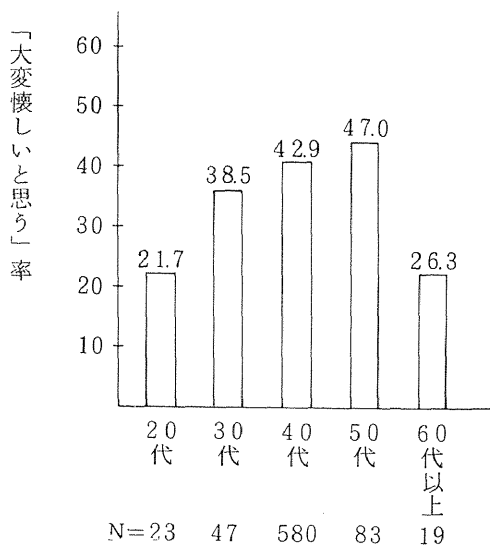


図1. 年代別「懐しい」率

図のように、50代までは年齢の増加とともに懐しさは増大するが、60代以上になるとこれが20代のレベルにさがる。この理由ははっきりしないが、たとえば、「ふるさと」を離れて30年以上もよそに住んでいれば、そこが「ふるさと」となるという適応の状態を表わしているのかもしれない。

ついで、2.1で記述した「ふるさと意識」の有無(質問2)と「ふるさと」への懐しさ(質問8)をクロスさせて次の表10を作成し、この関係を検討する。

表10. 「ふるさと意識」と懐しさ

Q2	Q8	1.たいへん懐しい	2.まあ懐しい	3.あまり懐しくない	4.全く懐しくない	全体
「ふるさと意識」	1. はっきりある	288 53.3%	208 38.5	38 7.0	6 1.1	540 100.0
	2. はっきりしないがある	17 16.2	63 60.0	21 20.0	4 3.8	105 100.0
	3. な い	34 22.8	61 40.9	40 26.8	14 9.4	149 100.0
	合計	339	332	99	24	794

表からわかるように、「ふるさと意識」が明確なグループ程懐しさの感じも強くなっていて、これがはっきりしないグループは相対的に、ふるさとへの懐しさが弱い傾向が読み取れる。これは、 χ^2 -検定を行うと $\chi^2 = 124.19$ (自由度=6, $P < .001$) で有意差がある。 χ^2 を用いて定性関数係数をいくつか算出してみる。たとえば、ピアソンの連合係数では .37, クラメールの連関係数では .27となって、それ程強い相関ではないが上記のような傾向はあるといえる。

それでは、ふるさとへの懐しさの源泉は何だろうか。これを検討するためにふるさとへの懐しさ(質問8)とあとで扱う質問6による「ふるさとイメージ」(6) あなたは「故郷」と聞いてどんなことを思い浮かべますか。おもなものを3つ選んでください。とをクロスさせてみた。表11は質問8で「大変懐しい」+「まあ懐しい」=「懐しい」グループとして、そして「あまり懐しいとは思わない」+「全く懐しい気持ちはない」=「懐しくない」グループと2分類して、「ふるさと」から思い描くイメージを1~9のカテゴリーで回答してもらった質問6の結果から両グループを比較するために作成された。

回答は複数個(3つ)の選択なので各グループごとの比率は合計しても100%にはならない(全員が質問に忠実に3つ選んだ場合は合計は300%となる)。表11の上段は実数、中段は比率(パーセント)、下段は比率の大きい順にランクをつけたものである。

こうしてみると、両群の間で最も大きな差があるのは9の「小学校の同級生や幼なじみ」である。これは明らかに「懐しい」グループの方に高い。もう1つは8の「自分が学んだ小学校の校舎や校庭」で、これは逆に、「懐しくない」グループの方に比率が高い。この原因

表 11. 「ふるさと」への懐しさとイメージ

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.	
Q 6	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	全 体
Q 8	思い出のある自然（山・川・野原・林など）	地方色豊かな言葉	豊かな人情	よく遊んだ場所 （社寺の境内・公園・広場・小路など）	鎮守の社とお祭り	先祖のお墓	自分が生れ育った家と隣近所	自分が学んだ小学校の校舎や校庭	小学校の同級生や幼なじみ	
「懐しい」 グループ	474 69.4% 1位	127 18.6 7	141 20.6 5	270 39.5 3	74 10.8 9	141 20.6 5	364 53.3 2	87 12.7 8	208 30.5 4	683
「懐しくない」 グループ	81 65.9% 1位	24 19.5 6	28 22.8 5	56 45.5 3	12 9.8 9	19 15.4 8	60 48.8 2	29 23.6 4	22 17.9 7	123

についてはいろいろな推論ができるがよくわからない。

ここで、ランクの方に着目すると興味あるのは両グループのランクのずれである。「懐しい」グループの方がより上位に挙げているのが6の“先祖のお墓”，9の“小学校の同級生や幼なじみ”である。従って、全般的にみれば1の“思い出のある自然（山，川，野原，林など）”，7の“自分が生れ育った家と隣近所”などが多く挙げられているのであるが，上記の6，9が特徴であることを示している。

なお、「ふるさと」への懐しさは，他府県に住んでいる人の方がやゝ強いことはデータにも示されている。

また、「ふるさと」への懐しさは「ふるさと」におけるいつ頃の生活と結びついているかを検討するために，後述の質問10とのクロスをとって見たところ，「懐しい」グループの方が“小学校～中学校時代”に集中する度合いがやゝ高いことがわかった。

2.4 「ふるさと」へ帰りたいと思うか

質問9では“あなたは故郷(郷里)に住みたいと思いますか”という質問を行っている。これにたいする全体的回答分布は次のようになった。

表12. 「ふるさと」に住みたいか

Q 9	頻 度	比 率
1. <input type="checkbox"/> 現に郷里に住んでいる	148	18.0%
2. <input type="checkbox"/> 現に郷里に近い所に住んでいるのでこれでよい	202	24.5
3. <input type="checkbox"/> 出来れば郷里に住みたいが、職場の都合で出ている	59	7.2
4. <input type="checkbox"/> 老後は郷里に帰って住みたい	70	8.5
5. <input type="checkbox"/> 特に郷里に住みたいと思わない	167	20.3
6. <input type="checkbox"/> 郷里よりも現住所の方が便利で良い	121	14.7
7. <input type="checkbox"/> 郷里には絶対住みたくない	12	1.4
8. <input type="checkbox"/> その他	45	5.4
合 計	824	100.0

(NA=3)

この質問9と現在どこに住んでいるか(質問7)とのクロス表から計算すると、生まれ故郷に現在住んでいなくて、他府県に住んでいるグループ(343名)のうち、3「出来れば郷里に住みたいが、職場の都合で出ている」と4「老後は郷里に帰って住みたい」の合計(96名)の比率は28%となって、これがなんらかの意味で望郷組の比率を示していることになる。

3. 「ふるさと」のイメージ

— 連 想 の 分 析 —

質問6では「ふるさと」と聞いてどんなことを思い浮べるかを訊ねている。9個の選択肢の中から3つを選んでもらった結果の全体分布は次の表13のようである。

表 13. 「ふるさと」のイメージ

Q 6. あなたは「故郷」と聞いてどんなことを思い浮かべますか。おもなものを3つ選んでください。	頻 度	比 率
1. <input type="checkbox"/> 思い出のある自然（山、川、野原、林など）	569	68.8%
2. <input type="checkbox"/> 地方色豊かな言葉	154	18.6
3. <input type="checkbox"/> 豊かな人情	173	20.9
4. <input type="checkbox"/> よく遊んだ場所（社寺の境内、公園、広場、小路など）	336	40.6
5. <input type="checkbox"/> 鎮守の社とお祭り	89	10.8
6. <input type="checkbox"/> 先祖のお墓	163	19.7
7. <input type="checkbox"/> 自分が生れ育った家と隣近所	436	52.7
8. <input type="checkbox"/> 自分が学んだ小学校の校舎や校庭	118	14.3
9. <input type="checkbox"/> 小学校の同級生や幼なじみ	231	27.9

ここで、質問2でたずねた「ふるさと意識」の有無とこの「ふるさと」イメージの関係をもう少し追ってみるために次のような表14を作成する。数値は上段が実数、中段が各グループを母数とした比率、下段はその比率の高い方からつけたランクである。

表 14. 「ふるさと意識」とイメージ

Q 2	Q 6	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.	全 体
		<input type="checkbox"/> 思い出のある自然（山・川・野原・林など）	<input type="checkbox"/> 地方色豊かな言葉	<input type="checkbox"/> 豊かな人情	<input type="checkbox"/> よく遊んだ場所（公園・広場・小路など） （社寺の境内・）	<input type="checkbox"/> 鎮守の社とお祭り	<input type="checkbox"/> 先祖のお墓	<input type="checkbox"/> 自分が生れ育った家と隣近所	<input type="checkbox"/> 校庭 自分が学んだ小学校の校舎や	<input type="checkbox"/> 小学校の同級生や幼なじみ	
「ふるさと」意識	1. はっきりある	385 69.5% 1位	104 18.8 7	109 19.7 6	211 38.1 3	60 10.8 9	130 23.5 5	297 53.6 2	78 14.1 8	157 28.3 4	554
	2. はっきりしないがある	66 62.3% 1位	19 17.9 6	23 21.7 5	46 43.4 3	9 8.5 9	15 14.2 8	54 50.9 2	18 17.0 7	33 31.1 4	106
	3. ない	111 71.6% 1位	19 12.3 7	35 22.6 5	76 49.0 2	19 12.3 7	15 9.7 9	76 49.0 2	22 14.2 6	38 24.5 4	155

この表からみる限り全体的なランクの一致度はかなり高く、「ふるさと意識」の強弱で「ふるさと」のイメージに差がみられないように思われるが、細く見ると興味あるずれが存在する。それは6の“先祖のお墓”である。「ふるさと意識」のはっきりしているグループの方が明らかに順位が高い。これが、その意識の源泉の1つとなっていることは十分考えられる。因に、表15の各項目のランクの全体的な一致度をみるため、ケンドールの一致係数Wを算出すると $W=.91$ となつてかなり高い値が得られている。

この質問6の「ふるさと」イメージを県別にブレイクダウンしてみたのが次の表15である。

表 15. 県別にみた「ふるさと」イメージ

Q 6 県グループ	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.
	<input type="checkbox"/> 思い出のある自然 (山・川・野原・林など)	<input type="checkbox"/> 地方色豊かな言葉	<input type="checkbox"/> 豊かな人情	<input type="checkbox"/> 公園・広場・小路など よく遊んだ場所(社寺の境内・)	<input type="checkbox"/> 鎮守の社とお祭り	<input type="checkbox"/> 先祖のお墓	<input type="checkbox"/> 自分が生れ育った家と隣近所	<input type="checkbox"/> 校庭 自分が学んだ小学校の校舎や	<input type="checkbox"/> 小学校の同級生や幼なじみ
1. 東京都	71.3%	22.2	22.8	43.7	8.4	16.8	49.7	21.0	26.3
2. 神奈川県	65.8	26.3	13.2	57.9	5.3	13.2	50.0	13.2	15.8
3. 埼玉県	11.3	18.3	26.6	36.1	13.6	18.3	53.3	11.2	29.0
4. 栃木県	12.9	14.2	20.5	44.7	13.2	16.3	56.8	13.2	27.4
5. 茨城県	100.0	14.3	14.3	42.9	14.3	0.0	42.9	14.3	28.6
6. 千葉県	42.9	28.6	28.6	50.0	7.1	14.3	71.4	21.4	21.4
7. 岡山県	66.1	11.9	20.3	30.5	11.9	40.7	45.8	16.9	35.6
8. 山形県	67.7	29.0	12.9	41.9	3.2	12.9	54.8	9.7	35.5
9. 静岡県	69.5	20.3	15.3	49.2	8.5	28.8	50.8	11.9	30.5
10. 広島県	74.2	21.0	14.5	24.2	11.3	25.8	48.4	9.7	29.0
11. 宮城県	76.7	10.0	23.3	33.3	10.0	16.7	63.3	13.3	26.7

表15の数値は、3つの項目を選択するmultiple-choice法による各県別グループの選んだ比率を示している。この11×9のデータ行列を用いて主成分分析を行ない、対象としての府県の位置や変数としての9個のイメージ項目の位置関係をグラフに表現してみよう。

まず、表15から11個の県を対象として9個の変数を用いて変数間の相関行列表(表16)を作成し、これから主成分分析を行なうと表18のような主成分負荷行列とスコアの行列が得られる。

表 16. 「ふるさとイメージ」項目間の相関係数行列

Q 6	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1. 思い出のある自然(山, 川, 野原, 林など)	1.000	-0.049	-0.562	-0.088	-0.194	-0.119	-0.414	0.024	0.096
2. 地方色豊かな言葉	-0.049	1.000	-0.145	0.507	-0.783	-0.229	0.252	0.084	-0.320
3. 豊かな人情	-0.562	-0.145	1.000	-0.093	0.250	0.086	0.635	0.585	-0.157
4. よく遊んだ場所(社寺の境内, 公園, 広場, 小路など)	-0.088	0.507	-0.093	1.000	-0.483	-0.435	0.198	0.279	-0.613
5. 鎮守の社とお祭り	-0.194	-0.783	0.250	-0.483	1.000	0.074	-0.315	-0.051	0.217
6. 先祖のお墓	-0.119	-0.229	0.086	-0.435	0.074	1.000	-0.146	-0.013	0.422
7. 自分が生れ育った家と隣近所	-0.414	0.252	0.635	0.198	-0.315	-0.146	1.000	0.294	-0.329
8. 自分が学んだ小学校の校舎や校庭	0.024	0.084	0.585	0.279	-0.051	-0.013	0.294	1.000	-0.314
9. 小学校の同級生や幼なじみ	0.096	-0.320	-0.157	-0.613	0.217	0.422	-0.329	-0.314	1.000

表 17. 「ふるさと」イメージの主成分分析

変数 (Q6)	主成分負荷量				県	主成分スコア			
	I	II	III	IV		I	II	III	IV
1	-.196	-.643	-.280	.577	1. 東京	.538	.184	-.476	1.559
2	.721	-.390	.418	-.012	2. 神奈川	1.402	-1.386	-.526	-.401
3	.255	.932	.014	.108	3. 埼玉	-.372	1.289	.203	-1.627
4	.791	-.257	-.203	-.073	4. 栃木	-.081	.968	-.359	-1.529
5	-.634	.485	-.513	-.193	5. 茨城	-.651	-.916	-2.430	.047
6	-.464	.240	.595	.341	6. 千葉	2.075	1.259	.356	.714
7	.618	.522	.270	-.089	7. 岡山	-.549	.628	.677	1.605
8	.444	.442	-.242	.690	8. 山形	.259	-1.515	1.705	-.489
9	-.734	-.024	.414	.089	9. 静岡	-.203	-.694	.669	.160
					10. 広島	-1.133	-.555	.572	-.209
寄与率	33.0%	25.1%	13.5%	11.2%	11. 宮城	-.284	.739	-.392	.171

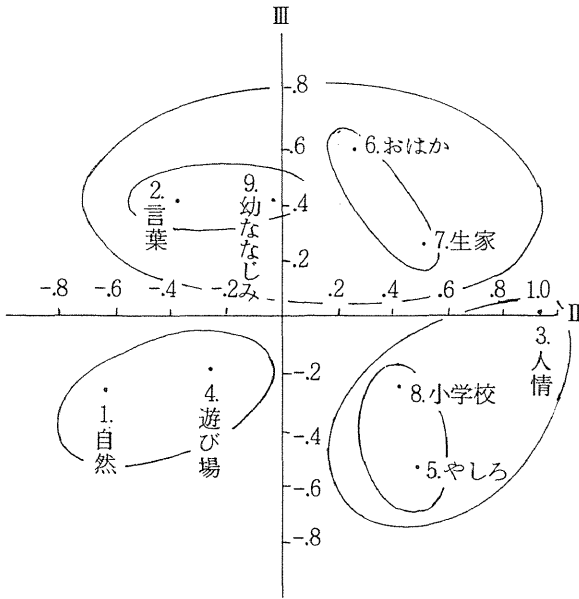


図2. 「ふるさと」イメージ主成分分析(Ⅱ軸 vs. Ⅲ軸)

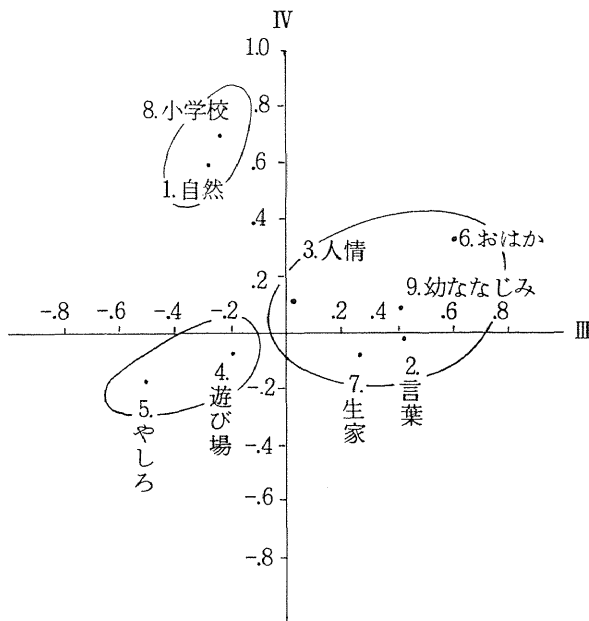


図3. 「ふるさと」イメージ主成分分析(Ⅲ軸 vs. Ⅳ軸)

第4主成分までとると寄与率は80%を超えるので、4つまでで十分であろう。主成分の解釈は表17の負荷量をみてもなかなかむずかしいのであるが、これらの軸を組み合わせたグラフを全て描いてみて意味がかなりはっきりする布置を、ここでは2つだけ取上げて図示する。

負荷量に基づく解釈はむずかしいが、図2, 3から得られる変数のクラスターにはそれなりの意味づけが可能であろう。

特に、図2にみられるように子供時代の自然や環境(空間的)を表わすクラスター、小学校ややしろ、人情などのクラスター、言葉・幼なじみとおほか・生家をまとめたクラスターというように3つくらいに分かれているのは大変尤もらしい結果である。

以上は変数に与えられた負荷量のプロットであったが、主成分スコアに基づいた府県のプロットはどのような布置を示すだろうか。変数の方で意味づけが最もうまくいきそうなⅡ軸-Ⅲ軸のグラフに対応したスコアの分布を図4で示す。ある程度の地方ごとのクラスターが形成され

てはいるが全般的には必ずしも明瞭な結果ではない。

そこで、さらに府県別の遠さ近さ、すなわち類似性を別の方法で解析し、もっとよい情報集約の仕方がないかどうかを検討しようと試みた。それは、表15のデータを用いて11の府県間の距離行列を次のようにして作成し、その距離行列に非計量的なMDS (multidimensional scaling) を施してみようというものである。すなわち X_{ij} で i 番目の県の j 番目の変数のデータ

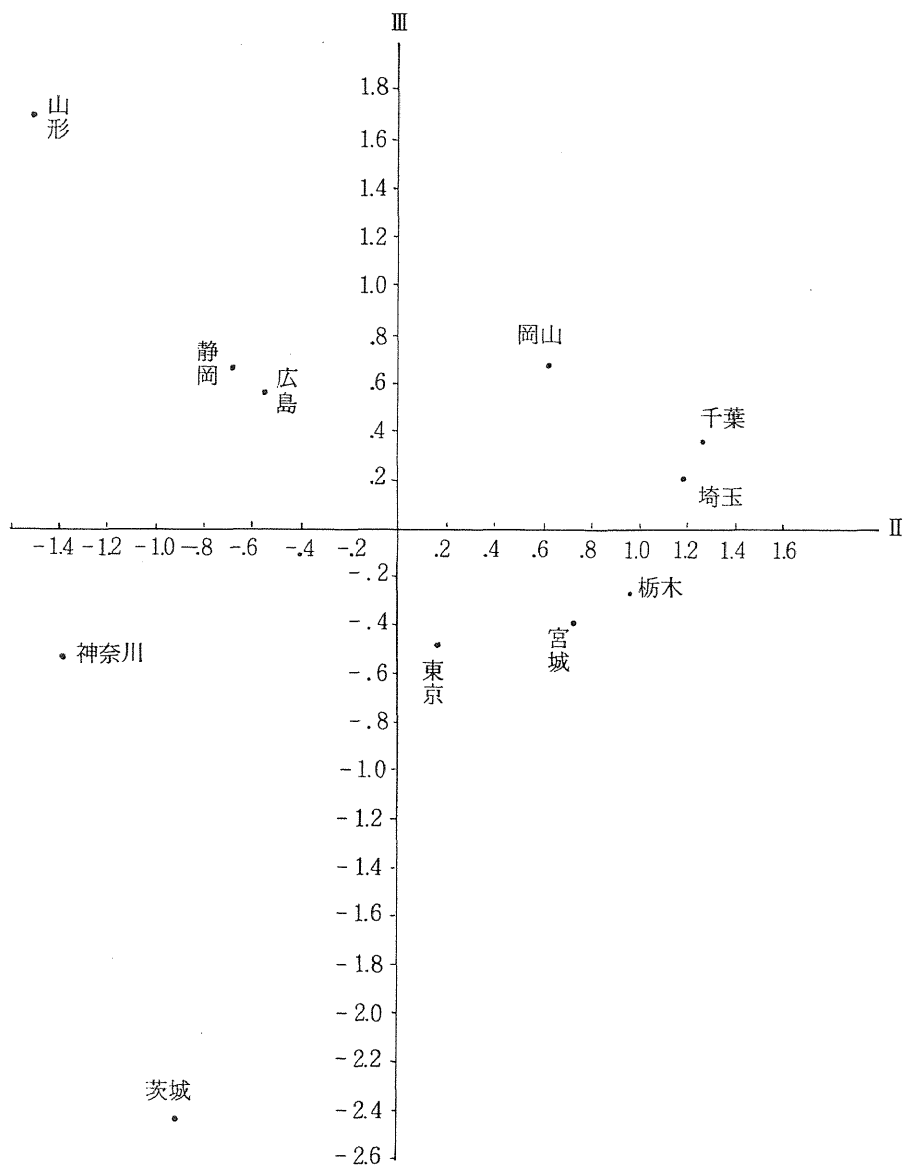


図4. 「ふるさと」イメージ主成分分析(県の布置)

(パーセント)を表すとすると、 i 番目の県と k 番目の県との距離を d_{ik} として

$$d_{ik} = \sum_{j=1}^9 |X_{ij} - X_{kj}|$$

という形で算出しようとする。もともとのデータが距離の公準を充たしているかどうかわからないのでかりにこのようなラフなメジャーを作成し、これをランクの扱いで処理すればよいと考えたわけである。こうして構成された $\{d_{ik}\}$ の距離行列をSASのプログラム・パッケージにあるALSCALを用いてノンメトリックなMDSにかけた。ノンメトリックな方法は因子分析よりも一般に次元の集約性が高いので2～3次元で解き得たところストレスはかなり小さくなり適合度が極めてよいことが示された。

しかしながら、そのグラフをプロットしてみると図4の主成分分析の布置とあまりよい一致度が得られず、栃木・埼玉、広島・岡山などの相互に近いクラスターは得られるものの全体的な意味づけのうまくいく様相を示していなかった。解釈の点では図4の主成分分析の方がよかったといえる。ただし、この手法は、もし、大サンプルを取って全国的規模の調査を行なって得られたこのような意識調査から県民意識の地図を作成する時には極めて有効な手段となるであろう。

4. 「ふるさと」意識の形成

4.1 「ふるさと」意識の形成の影響要因

質問11ではあなたの持っている故郷意識に大きな影響を与えたのは次の中のどれですか。

2つあげてください”という質問をして、ふるさと意識の基礎と考えられる出来事や生活の内容をたずねている。その全体的回答の分布は表18のようになる。

表 18. 「ふるさと意識」の形成要因

Q 11.	頻 度	比 率
1. <input type="checkbox"/> 朝夕に眺めた美しい自然、思い出のある山や小川など	399	48.2%
2. <input type="checkbox"/> 近所の子供達や村人たちと楽しく過した祭りや正月などの年中行事	280	33.9
3. <input type="checkbox"/> 幼い日々、家族や近隣の人たちと遊び場で楽しく過したこと	316	38.2
4. <input type="checkbox"/> 小学校での級友や先生との生活	154	18.6
5. <input type="checkbox"/> 中学校での級友や先生との生活	136	16.4
6. <input type="checkbox"/> 高等学校での級友や先生との生活	41	5.0
7. <input type="checkbox"/> 同じ職場の人びととの生活	38	4.6
8. <input type="checkbox"/> その他	55	6.7

回答は2つ選ぶので全体は勿論100%を超える。とにかくその項目が選ばれた比率である。

選択肢の1, 2, 3への回答の集中をみればわかるように、美しい自然や幼い日々の人々との交流による楽しい思い出を挙げる人が多い。それについて小中学校の生活が比率は1/2くらいになって続いている。

これを年齢でブレイクダウンしてみると表19のようになり、年齢が高くなると明らかに反応率が上昇するのは2の項目であることがわかる(図5)。そして、逆に年齢とともに反応率が減少するものは項目5である(図8)。3, 4の項目なども年齢差がみられる興味ある形の分布を示している(図6, 7)。

表19. ふるさと意識の形成要因(年代別)

年代 \ Q11	1	2	3	4	5	6	7	8	
20代	10 43.5%	5 21.7	12 52.2	6 26.1	5 21.7	1 4.3	2 8.7	2 8.7	23
30代	62 50.8	42 34.4	45 36.9	23 18.9	22 18.0	5 4.1	8 6.6	5 4.1	122
40代	271 46.7	193 33.3	219 37.8	109 18.8	107 18.4	28 4.8	25 4.3	33 5.7	580
50代	47 56.6	29 34.9	32 38.6	11 13.3	8 9.6	7 8.0	2 2.4	5 6.0	83
60代以上	8 42.1	11 57.9	8 42.1	5 26.3	2 10.5	0 -	1 5.3	0 -	19

2. 近所の子供達や村人たちと楽しく過した祭りや正月行事などの年中行事

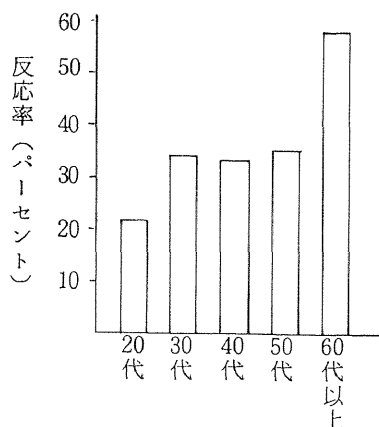


図5. ふるさと意識の形成要因(年代別) - 2

3. 幼い日々、家族や近隣の人たちと遊び場で楽しく過したこと

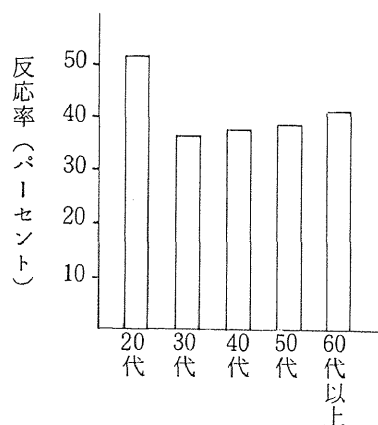


図6. ふるさと意識の形成要因(年代別) - 3

4. □ 小学校での級友や先生との生活

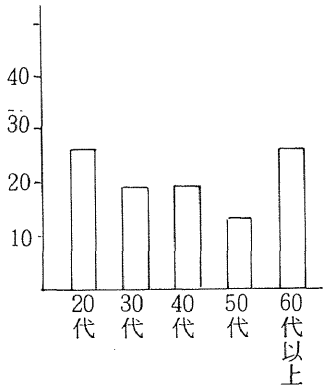


図7. ふるさと意識の形成要因(年代別) - 4

5. □ 中学校での級友や先生との生活

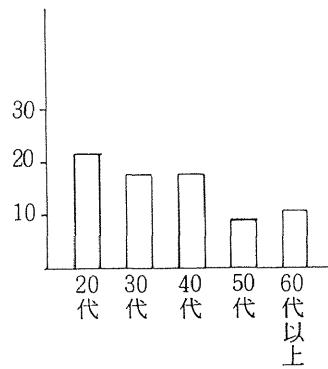


図8. ふるさと意識の形成要因(年代別) - 5

特に、3,4のように年令とともにいったん減少するが60代以上で上昇するタイプが、もし、一般的現象ならば、その理由をインタビューなどで確認するのも興味あることであろう。

性別では表20のように殆ど差がないといえる。

表20. ふるさと意識の形成要因(性差)

	1	2	3	4	5	6	7	8	
男 性	169 51.2%	102 30.9	123 37.3	65 19.7	50 15.2	23 7.0	11 3.3	23 7.0	330
女 性	230 46.3%	178 35.8	193 38.8	109 21.9	74 14.9	12 2.4	22 4.4	32 6.4	497

4.2 「ふるさと意識」の形成時期

質問10では、“あなたの持っている故郷意識に最も大きな影響を与えたのは何才ごろの生活だと思えますか。”というふうに、「ふるさと意識」に最も強く影響を与えたと思われる時期をたずねているが、その回答分布は表21のようになった。

このように、「小学校の高学年(4年~6年)」をモードに、「小学校の低学年(1年~3年)」,「中学校時代(13~15才)」などもそれに近く、要するに小中学校時代で70%を

超える。これは年齢、性別にみても殆ど差が見出せない一般的傾向であるといえる。

表 21. 「ふるさと意識」の形成時期

	頻 度	比 率
1. <input type="checkbox"/> 小学校に入る前	54	6.7%
2. <input type="checkbox"/> 小学校の低学年（1年～3年）	173	21.5
3. <input type="checkbox"/> 小学校の高学年（4年～6年）	224	27.9
4. <input type="checkbox"/> 中学校時代（戦前では高等小学校または 中学1～2年）（13～15才）	178	22.1
5. <input type="checkbox"/> 高等学校時代（戦前では中学校・女学校 3～5年）（16～18才）	57	7.1
6. <input type="checkbox"/> 19才以後	118	14.7
合 計	804	100.0

5. 「ふるさと意識」の養成

質問16では、“現在住んでいる地域に、子供達の良い生活環境をつくり、故郷意識を育てるためにはどうするのがよいと思いますか、2つ選んでください。”という、こどもたちに「ふるさと意識」を育てるのにどのような方法がよいと思うかをたずねている。全体的分布は表22のようである。

表 22. 「ふるさと意識」の養成法

Q16	頻 度	比 率
1. <input type="checkbox"/> 身近かな自然をより美しく守る	534	64.6%
2. <input type="checkbox"/> 遊びの広場、遊戯施設、グラウンド・コート などを整える	260	31.4
3. <input type="checkbox"/> 図書館などの文化施設を整える	137	16.6
4. <input type="checkbox"/> 神社の祭りなどを盛んにする	131	15.8
5. <input type="checkbox"/> 地域子供野球などを育成する	46	5.6
6. <input type="checkbox"/> かつてあった年中行事を復活する	128	15.5
7. <input type="checkbox"/> 地域子供会の活動を盛んにする	181	21.9
8. <input type="checkbox"/> その他	52	6.3

これも、複数個（2つ）の選択なので分布の合計は100%を超える。表のように、「身近かな

自然をより美しく守る」ことが圧倒的に多く選ばれ第一位になっている。この感覚が親の世代の「ふるさと意識」や「ふるさとへの懐かしさ」の極めて重要な原因となっていたことは、すでに見て来たいくつかのデータで確認されているので、それらの結果と合わせて考えるとその意味が明瞭となるであろう。ついで、「遊びの広場、遊戯施設、グラウンド・コートなどを整える」、「地域子供会の活動を盛んにする」ことなど、主として仲間との遊びの場を提供することが挙げられている。

表23. 「ふるさと」への懐かしさと「ふるさと意識」の養成

Q8 \ Q16	1	2	3	4	5	6	7	全体
1. 大へん懐しい	225 65.2%	76 22.0	9 2.6	22 6.4	4 1.2	8 2.3	3 0.9	345
2. まあ懐しい	214 63.3	55 16.3	16 4.7	12 3.6	5 1.5	8 2.4	12 3.6	338
3. あまり懐しくない	66 66.7	14 14.1	6 6.0	3 3.0	—	1 1.0	2 2.0	99
4. 全く懐しくない	16 66.7	5 20.8	—	—	—	—	1 4.2	24

表23は、質問8と16のクロスから、ふるさとへの懐かしさの強度によって「ふるさと意識」の養成方法にたいする見方の差異がみられないかどうかをみたものであるが、「自然」については全く差がないといってよく、その他については明確な傾向差が見出せない。ただ、2の項目(遊び場)については懐かしさの強いグループと弱いグループで同じくらいで、その中間のグループがそれよりひくいという興味あるカーブが得られている。

6. ま と め

今回の調査の対象者グループについては、“あなたは生れたところに現在すんでいますか”という質問7によると次の表24のような周辺分布が得られる。

これによれば、少くとも生れた府県と同じ府県内に現在も住んでいる人々は全体の56.2%、生まれ故郷を離れて他府県に住む人々が全体の41.6%である。

表 24. 生まれたところに住んでいるか。

Q 7	頻 度	比 率
1. <input type="checkbox"/> 住んでいる	122	14.8 %
2. <input type="checkbox"/> 住んでいない。しかし同じ町村内にいる	61	7.4
3. <input type="checkbox"/> 住んでいない。しかし同じ市区郡内にいる	115	14.0
4. <input type="checkbox"/> 住んでいない。しかし同じ府県郡内にいる	165	20.0
5. <input type="checkbox"/> 住んでいない。現在住んでいるのは他府県である	343	41.6
6. <input type="checkbox"/> 住んでいない。生れたところは外国である	18	2.2
	824	

(NA = 3)

他府県に住んでいる人の率でみると、千葉(85.7%)、神奈川(76.3%)、埼玉(62.1%)、東京(56.5%)と首都圏とその周辺の県に於いて明確に高く、逆に、同一の府県に住んでいる人の多いと思われる県は茨城、静岡、山形、宮城などである。細かくみれば問題はありますが、これらのサンプル特性はNHKの調査、統計数理研究所の県民性の調査などで得られている全国的な傾向とも比較的よく適合しているように思われる。

これら他府県に住んでいる人々の方に「ふるさと意識」が強く、故郷を懐しむ傾向が強いことはすでに記述したとおりである。

次に、質問7と質問12(現住所に何年住んでいるか)のクロス表を次のように作成してみる(表25)。この表の上段の数値に実数で下段はNA(無回答)をのぞく全体(820名)にたいする比率である。これからわかるように、生れたところに住んで31年以上になる、いわばnativeともいえる人々が11.4%いる。これを同一府県までひろげると14.4%となる。

さらに、もう少しゆるめて、少なくとも生れた府県内に21年以上住んでいる人々ということでnativeを定義してみると、21.4%がそれに該当する。このような対象者グループの特性を考慮してデータを読み取る必要があるだろう。

次に、質問13,14を表26,27に示す。これらの表のように、結婚を契機にふるさとを離れるケースが最も多い。特に女性の場合が多く、男性の12.4%にたいして女性は45.5%となっている。これにたいして、「職場の関係から」は男性の方にやゝ高い率を示す。

ふるさとを離れた現住所にも、一般にかなりの愛着を感じているようであるが、では、現住地への愛着がいくらかでもある人々は、どのような理由でそのように感じるのかを質問15への回答分布からみると表28のようである。

表 2.5. 現住所と居住年数

Q12 \ Q7	1	2	3	4	5	6	合計
1. 5年以内	4 0.5%	9 1.1	12 1.5	26 3.1	76 9.2	2 0.2	129
2. 6~10年	6 0.7	7 0.8	25 3.0	28 3.4	73 8.8	4 0.5	143
3. 11~20年	12 1.5	29 3.5	57 6.9	67 8.1	153 18.5	6 0.7	324
4. 21~30年	4 0.5	6 0.7	16 1.9	32 3.9	37 4.5	3 0.4	98
5. 31年以上	94 11.4	10 1.2	4 0.5	11 1.3	4 0.5	3 0.4	126
合計	120	61	114	164	343	18	820

(NA=7)

表 2.6. ふるさとを離れている理由

Q13. あなたが現住所に住むようになったのは、 どのような理由からですか。	頻度	比率
1. <input type="checkbox"/> 住宅の関係から	154	24.4%
2. <input type="checkbox"/> 職場の関係から	91	14.4
3. <input type="checkbox"/> 自営の商売の関係から	54	8.5
4. <input type="checkbox"/> 結婚によって	267	42.2
5. <input type="checkbox"/> 子供の教育のため	8	1.3
6. <input type="checkbox"/> よい文化環境を求めて	10	1.6
7. <input type="checkbox"/> よい自然環境を求めて	10	1.6
8. <input type="checkbox"/> その他	38	6.0
合計	632	100.0%

(非該当, NA=195)

表27. ふるさとを離れた現住所への愛着

Q14. 現在住んでいるところに故郷と同じような愛着を感じますか	頻度	比率
1. <input type="checkbox"/> 故郷以上の愛着を感じる	52	8.2%
2. <input type="checkbox"/> 故郷と同じように愛着を感じる	198	31.1
3. <input type="checkbox"/> 故郷ほどではないが愛着を感じる	265	41.6
4. <input type="checkbox"/> ほとんど愛着を感じない	91	14.3
5. <input type="checkbox"/> その他	31	4.9
	637	100.0%

(非該当, NA = 190)

表28. 現住地への愛着 — その理由

Q15. 上のQ14の質問で, 1, 2, 3のいずれかに○をつけた方(愛着を感じると答えた方)はその理由をお聞かせください。	頻度	比率
1. <input type="checkbox"/> 長年住みなれたから	172	34.0%
2. <input type="checkbox"/> 隣近所の人と気心が知れているから	98	19.4
3. <input type="checkbox"/> 生活上便利だから	97	19.2
4. <input type="checkbox"/> 持家をつくっているから	122	24.1
5. <input type="checkbox"/> 商売をするのによいから	18	3.6
6. <input type="checkbox"/> よい職場があるから	3	0.6
7. <input type="checkbox"/> まちがきれいで文化施設もあるから	14	2.8
8. <input type="checkbox"/> よい自然環境があるから	75	14.8
9. <input type="checkbox"/> 子供の教育によいから	20	4.0

(非該当, NA, その他 = 321)

表28から, 長年住みなれて生活の根をおろしている現住地での適応の状況が反映された結果になっている。

本調査は tentative なものであるから, 日本人のこのようなふるさと意識の全体像を正確に把握するには十分でないことは勿論である。県単位の解析を必要とするので, 理想的には相当

しかし、以上みてきたさまざまな質問への回答から、人々のふるさととのかかわりが、ふるさとからの空間的隔りや時間的位相の差や現状への心理的適応の状態などによって、さまざまな形態をとるその様相が見出されたことは、次のステップへの大きな手掛りとなるものと思われる。

謝 辞：本調査のデータのコンピュータ処理に、社会科学系菱山謙二先生のご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

(上 笹 恒)

〔あ と が き〕

この調査はもともと、本会々長朝倉隆太郎先生の退官記念論文集に入れるべき研究物の一つとして実施されたものである。より多くの方々に調査実施に参加して戴くという趣旨が第一であって、特別の研究仮説を設けたものではなかった。

吉田恭爾先生と横山が質問項目を作成したうえ、連絡事務と資料整理を横山が行い、集計処理と結果の考察は吉田先生にやって戴くことになっていた。

夏休み前半に学生諸君の協力を得て、資料整理と、データカードへのパンチ入れをして9月の休み明けを待ったが、そこで接したのが吉田先生の計報であった。

思えば、この調査が吉田先生の文字通り最度の研究調査となったのである。夏休みに入る前の6月19日、この日吉田先生は調査結果の集計方法の打合せのために横山の研究室を訪ねてくださったが、数ヶ月ぶりにお会いした私は、ハッと息を呑んだ。あまりにやつれた先生のお姿に、病状の深刻さを知ったからである。揮身の力をこめて、廊下を歩いておられた先生のお姿が目に焼きついた。

9月中旬になり、途方に暮れた私は、上笹先生にご相談したところ、吉田先生にかわって集計処理をしてくださることを快諾、その上原稿執筆まですべて引受けてくださり、このように立派にまとめて戴いたのである。本誌本号を、吉田先生の追悼の意を込めて編集するという委員の方針をうけ、急遽この調査結果を本号に転載することにしたのである。従って朝倉先生の記念論文集には、これとは違った形の資料紹介をさせて戴くことになった。ご協力戴いた会員の皆さんにご了解願う次第である。

(横山 十四男)